5 生　活　科

佐和真由美・須本良夫

1　生活科でめざす自立とは

生活科の教科目標は，次のとおりである。

> 具体的な活動や体験を通して，自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ，自立への基礎を養う。

この目標を受けて，子どもたちの「自立」を考えるとき，次の３つの側面からとらえることができよう。

(1)　生活上の自立　(2)　精神上の自立　(3)　学習上の自立

具体的には

①　学級や学校という集団や社会の一員として集団生活ができる。

②　自分のことは自分ですることができる。

③　日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。

④　学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり，自分の意志を人に伝えたりすることができる。

⑤　人の話をきちんと聞き，自分の考えを深めることができる。

ということに置き換えて考えることができる。

2　本校生活科でめざす子どもの姿

自立という観点から，本校でめざす子ども像をあげてみる。

(1)　具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども

(2)　自分で見つけた問題について，自分なりに解決する方法を考えたり，試したりする子ども

(3)　自分で気づいたり感じたりしたことを豊かに表現する子ども

(4)　自分なりの考えをもち，考えに基づいて，判断したり，決定したりすることのできる子ども

(5)　人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども

(6)　自分や友達のしたこと（していること）をふりかえる子ども

(7)　生活科で活動したことを基に，自分の生活を自分で豊かにしよう，工夫しようとする子ども

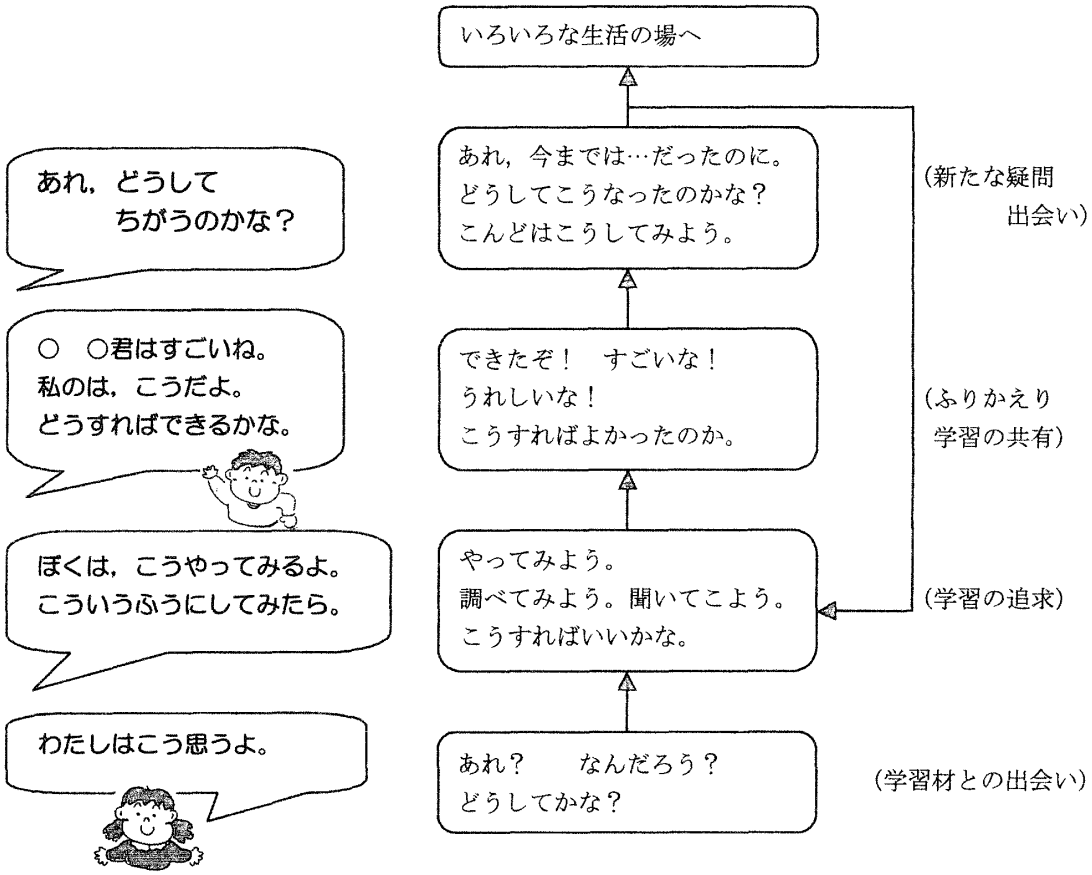
これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造　1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む　1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。

さらに，「自立に向かう子どもたちにむけて」サブテーマ―自立につながる自己決定―の実現に向けて，(4)(7)に焦点をあてて研究を進めてきた。今年度は，さらに人やものとかかわり合いながら自分の活動を豊かにしていけるように(5)(6)に焦点を当てて実践研究を進めていきたい。

3　生活科における具体的な活動や体験とは

生活科における具体的な活動や体験は，結果を得るための単なる方法や手段ではない。学習そのものが内容であり，方法である。そして活動自体が目標ともなっている。だからこそ，単によい結果だけを求めるのではなく，結果に至る過程を大切にしていきたい。それは子どもたちが学習材と出会い，試行錯誤を重ねる過程の中にこそ，子どもたちのさまざまな工夫や気づきが見られる。この過程でそれぞれの活動が絡まり合い刺激し合うことで，子どもたちは，自ら考えを発展させたり活動の仕方を選択したりしていけると言えよう。こうした活動や体験を積み重ねていけば，その時々で充実感や有用感を味わうことができ，どのような結果でもそれをバネとして次への活動へ挑戦していこうとするであろう。こうして，子どもたちが，生活科からあらゆる生活の場へ活動を発展させていくことが，子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。

4　具体的な授業の中で



5　総合的な学習との関連

総合的な学習は，「人とのかかわり」「もの（自然）とのかかわり」を通して，自分をみがき高めることをねらっており，生活科の学習を発展させていくものになっている。そこで，その基礎となる低学年では，問題解決的な活動の過程を大切にして，ゆったりと考えたり活動に没頭したりする時間を十分に取りたい。そのためにも，学習を進めていきながら年間指導計画の見直しを図っていきたい。子どもたちが「私はこうしたい」という思いをもち，自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で，人やものとかかわり合いながら，さまざまな発見をし，活動の楽しさを味わい，次々と活動を発展させていけるように実践をしていきたい。

6　成果と課題

昨年度の課題として，生活科の時間をこえて，生活科での学びが子どもたちのふだんの生活に返り，広がっていくものになるようにしていくこと。また，子どもたちにとって魅力のある学習材を探していくことが残った。本年度も，前述したように(5)と(6)の２点に焦点を当てて，この課題を解決できるよう実践に取り組んできた。この２つの観点でふりかえってみたい。

(1)　人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども

年間を通じて繰り返し活動ができるように年間計画を見直したり，単元を組み立てたりしてきた。それは，子どもたちが繰り返し活動をすることで，より広くより深く対象とかかわることができるようにと考えたからである。

子どもたちは，栽培や探検活動などで学習材と出会い，自分なりにめあてを決めて繰り返し対象とかかわるうちに，さまざまな不思議や気づきをもち，そこから新しいめあてをもって進んで活動に取り組むことができていた。また，ゆとりをもった活動計画によって，子どもたちが活動に没頭し，活動の楽しさを十分に味わうこともできていた。例えば，野菜の栽培において，子どもたちは，自分の野菜を育てるために，友達から，家族から，店の人から，いなかのおばあちゃんから，積極的に教わりながら，図書館やインターネットなどからも必要な情報を得るようになった。自分の活動に合わせて，自らかかわる対象を広げていったのである。単元の中で，各自の活動をお互いが認め合い，アドバイスをし合う場を設けることで，育て方だけでなくその調べ方なども，学び合い，自分の活動に生かすようになっていった。

また，昨年の課題から，年間活動計画の中に，春見つけなどの発見活動を位置づけることにした。その結果，子どもたちが，身の回りの自然だけでなく，出来事などからも「なぜだろう。」とさまざまな不思議を見つけ，不思議を解決するために調べ，追究し，新たな不思議に気づき，また追究していくことができるようになってきた。この活動を通して，身の回りの何からでも自分なりの発見や気づきをもてるようになり，さまざまな人やものとかかわり合いながら活動していくことを楽しむようになってきた。「調べたことは本当かな。」と実際に自分でやってみる子も増え，子どもたちの意欲的な姿を見て，家庭でもいっしょに調べに出かけたり，やってみたりする様子が伺えた。

年間計画や単元の構成を見直したことが，対象とのかかわりを広め深めることになり，多くの気づきを生んだり，学び方を身につけたりするために有効であったと言える。

(2)　自分や友だちのしたこと（していること）をふりかえる子ども

ふりかえりは，課題をつかみ活動していく中で，活動をふりかえる時に，というように，さまざまな場面で行うことができる。特に発表場面で，１年生，実習の先生，保護者へと相手をかえて，自分のしていることや工夫などを伝えることで，自分のしてきたことを改めて意識し，友だちの活動と比べて考えたり絡み合わせて考えたり，発表の相手を意識して活動を工夫したりすることができるようになった。そして，自分の活動のよさを認められることで，自分や活動に自信をもち，「嬉しいな。今度はもっとこうしていこう。」という次の活動へのめあてと意欲をもつことができていた。また，各自の活動を記録するファイルを使用することで，自分の活動を見通し，次の活動への指針とすることができていた。また，増えていくファイルに達成感や充実感を抱くこともできていた。

教師は，時間や場面を子どもにゆだねて，子どもたちが自分の活動をふりかえられるようにしていき，常に子どもの活動から自身の支援をふりかえることを心がけてきた。これからは，子どもの活動をどのように見取って子どもに返していくのか，よりよい支援と評価のあり方，また，子ども同士の相互評価のあり方について探っていきたい。